

白石条里制跡推定地ほか
発掘調査報告書

平成21年8月

白石市教育委員会

例　　言

1. 本書は白石条里制跡推定地、田上遺跡、鷹巣古墳群25号墳の発掘調査報告書である。
2. 本報告は白石市教育委員会が実施した発掘調査のうち、未報告であったものについて、年次計画に従って資料整理を進めたものである。
3. 本報告書の編集、作成は日下和寿があたった。執筆分担は次のとおりである。
白石条里制跡推定地の第1章～第3章は清野俊太朗、第4章～第6章、鷹巣25号墳は日下、田上遺跡の1～3は千葉典男である。
4. 報告書作成等にあたっては、宮城県教育庁文化財保護課をはじめとする次の機関・個人から協力をいただいた（敬称略）。
土師器、須恵器、奈良三彩　菅原祥夫（宮城県考古学会々員）、石本弘（白石市文化財保護委員）、佐藤敏幸（宮城県考古学会々員）、松村恵司（文化庁）、高島英之（群馬県埋蔵文化財調査事業団）、吉野武（宮城県多賀城跡調査研究所）、村田晃一、柳沢和明（東北歴史博物館）
近世陶磁器　佐藤洋（仙台市教育委員会）
奈良三彩写真撮影　稲野彰子（いろは写房）
5. 資料整理、報告書刊行に御指導いただいた故中嶋彰吾白石市文化財保護委員長、故高橋辰男委員に哀悼の意を表する。
6. 白石条里制跡推定地の第1図は国土地理院の2万5千分の1白石、大河原、白石東部、白石南西部を複製して使用した。同第2図は平成元年度白石市都市計画図、新白石駅前区画整理事業予定期から作成した。田上遺跡の第1図は白石市土地情報提供GISを使用した。
7. 検出構造の略号は以下の通りである。
S D : 溝跡　P : 柱穴
8. 本事業の調査記録及び出土品は、白石市教育委員会生涯学習課が保管しており、依頼に応じて公開している。

目　　次

白石条里制跡推定地.....	1
田上遺跡調査概要.....	21
鷹巣古墳群25号墳範囲確認調査.....	25
抄録.....	27
写真図版.....	28

白石条里制跡推定地

遺跡名：大鷹沢地区条里遺構（現在は白石条里制跡推定地）

遺跡所在地：白石市大鷹沢三沢地内（現在は白石市旭町）

遺跡番号：02400

第一次調査：昭和53年10月4日～昭和53年10月5日

調査面積：21m²

調査原因：白南闘場整備事業

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課・白石市教育委員会

調査員：宮城県教育庁文化財保護課調査第二係長 佐々木茂貞

タ 技術主査 早坂 春一

タ 平沢英二郎

タ 技師 小井川和夫

タ 丹羽 茂

白石市教育委員会社会教育課主事 清野俊太朗

第二次調査：昭和53年11月17日～昭和53年11月29日

調査面積：2,561m²

調査原因：新白石駅前区画整理事業

調査主体：白石市教育委員会

調査指導：宮城県教育庁文化財保護課調査技師 小井川和夫

タ 丹羽 茂

タ 高橋 守克

タ 太田 昭夫

調査員：白石市教育委員会社会教育課上事 清野俊太朗

調査参加者：高橋 正、佐藤重一、梶川三郎、志村清一、志村哲夫、佐藤藤吉、鈴木七三郎、

志村繁治、佐竹 保

調査費：2,226千円（第三次も含む）

第三次調査：昭和54年3月9日～昭和54年3月11日

調査面積：76.5m²

調査原因：新白石駅前区画整理事業

調査主体：白石市教育委員会

調査員：白石市教育委員会社会教育課主事 清野俊太朗

調査補助員：福島大学 菊地逸夫

調査参加者：高橋正、梶川三郎、志村清一、志村健一、鈴木七三郎、佐竹保

第四次調査：昭和55年12月11日～昭和56年2月10日

調査面積：336nf

調査原因：工場団地造成

調査主体：白石市教育委員会

調査員：白石市教育委員会社会教育課主事 清野俊太朗

調査補助員：福島大学 菊池逸夫、東北大学 相原淳一

調査参加者：不明

調査費：642千円

第1章 はじめに

白石市内では、戦後、片倉信光氏や亘理悟郎氏等によって条里制の遺存が指摘され、斎川、大平、大鷹沢、白石、郡山等の各地区に部分的に認められるとしている。

条里の土地区画は、一辺の長さ6町（約654m）四方の一区画を里または坊といい、南北を1条・2条、東西を1里・2里と数える。里はさらに各辺を1町ごとに6等分し、溝や畦などで坪と呼ばれる36の区画に分けられた。里の一隅から1坪・2坪と数える。

したがって、耕地の所在地は何条・何里・何坪を呼ばれるのが普通であった。前述の片倉、亘理の両氏は、市内に存在する地名と周辺の環境などから条里の存在を指摘していた。ちなみに、その例をあげると、金坪（白石）、中日（大平）、江坪（郡山）などである。また、斎川中流域は、古代の人々の班給に分田として用益され、これらの人々の徭役によって耕地の拡張が進められたとしている。

斎が川流域東側は現在でも穀倉地帯となっており、ほぼ平坦な水田が広がっている。今回の調査地区北東丘陵上には鷹巣古墳群があり、南部の斎が川右岸には亀田古墳群が存在し、この間一帯は水田地帯になっている。

これら古墳群築造当時にも被支配者等による耕地拡張や水田経営が活発に行われたであろうし、その規模や収穫は現在と比較にならないが、少なくとも、この頃から次第に増加をたどっていったであろう。このことは周辺の環境や遺跡の立地等から如実に窺える。

係る状況から判断すると、古代の生産的基盤を支える条里制の遺存が指摘されたことは、当然のことであると考えられる。

第2章 調査に至る経過

白石市の市街地の東側を斎が川が北流し、その流域には以前から数多くの遺跡の存在が確認されていた。時代別にみると縄文時代から中世まで長期にわたって人々が生活していたことが分かる。今回の中里遺構もその一つである。

白石市において条里遺構の存在が叫ばれたのは、昭和24年、亘理悟郎氏によってが最初である。当

時、地名等によって考察したものであった。近年、航空写真撮影の結果等により、その存在が次第に確実化してきたようである。

今回、この大鷹沢地区を中心とする一帯に、新幹線駅前の土地区画整備事業計画が起り、教育委員会は遺構の重要性から、関係機関と協議を重ねた結果、遺構の確認調査を実施することになった。

第3章 遺跡の位置と周辺の環境

白石条里制跡推定地は東北本線白石駅の南東1km、白石市大鷹沢三沢地区に位置し、斎が川東岸のやや微高する標高約45~46mの沖積地に立地している。

遺跡周辺は、市内でも有数の米どころであるが、近年市街地が著しくなっている。また、昭和50年前後に南部から実施された圃場整備が開始され、水田形態が大きく変化した。

この地区的北東丘陵上には、県指定史跡鷹巣古墳群があり、一部が古墳公園となり、その偉容を誇っている。宅地造成等による発掘調査は数次に亘って実施されている。また地区西側には、斎が川とその支流谷津川が北流しており、流域一帯には多くの遺跡が存在する。古墳～平安時代の包含地、白石沖遺跡や梅田遺跡がある。梅田遺跡（遠藤、清野1984）からは古墳時代前期埴輪式期、中期南小泉式期頃、後期栗田式期の住居跡が発見されている。谷津川遺跡（清野、遠藤1981）からは弥生時代から中世の遺物、中世の焼土遺構（焼成を受けた人骨、錢貨）が確認されている（森1980）。圃場整備工事中に発見された車丁古墳（斎藤1975）は、長径約13mの周溝を伴う円墳と考えられるもので、石棺が発見されている。

このほか条里制の存在が予想された地区は、斎川地区、大平地区、郡山地区等である。それぞれ、地名に数字や坪の字を揃しているのがみられる（第1表）。

第4章 調査の成果

第一次調査

白南ほ場整備事業に伴う調査であるが、既に面工事は完了しており、広い範囲での調査はできなかつた。調査は2日間行われ、発掘面積は21m²である。トレンチを水路と交叉する部分2ヶ所（3×3m、3×4m）に入れた。それぞれ第Iトレンチ、第IIトレンチとした（78-I、II）。

第Iトレンチの現水路は、表土から掘りこまれており、後世のものであることが明らかになったが、それより下層に底面のほぼ平坦な掘りこみが認められた。

第IIトレンチの現水路は第Iトレンチ同様後世のものであることが明らかとなった。しかし、その下層に、それよりかなり規模の大きな水路が認められた。この水路も表土から掘りこまれたものであるが、その規模から推して、かつて何らかの水路があり、それが順次拡張され成立したものと考えられる。なお、このトレンチにおいて旧表土と考えられる層から土師器片（古墳時代、南小泉式？）が出土したが、現物不明である。

第二次調査

新白石駅前区画整理事業に伴う発掘調査である。調査は10日間行われ、発掘面積は2,561m²に及ん

だ(78年、第Ⅰ区、第Ⅱ区)。第Ⅱ区東側で現在の水路と平行する二条の溝が発見された。確認面は現水田下約20cmである。溝の上幅は50~60cmで、深さは4~6cmである。確認面から土師器片も出土しているが、表面剥離のため器面調整は不明であった。これらは現在、現物不明である。旧河川跡と考えられる大溝状造構二条も発見された。確認面は4層上面で、現水田下約35~40cmで認められ、幅15.4m、深さ70cmの規模である。堆積土は非常に砂っぽく全体に及んでいる。更にもう一方の大溝状造構の確認面は現水田下約30~35cmで認められ、幅3.7m、深さ55cmの規模である。堆積土は同じく砂質に富んでいる。いずれからも遺物の出土は認められなかった。また、断面においてピットが4基確認されている。直径は20~70cm程のものである。

第三次調査

新白石駅前区画整理事業に伴う発掘調査である。調査は3日間行われ、発掘面積は76.5m²である。トレンチによる調査で確認を行った。第Ⅰトレンチでは現存する畦・水路・水田を調査した。いずれも現在のもので、古い時期の造構は確認されなかった。第Ⅱトレンチでは、農道・水路・畦・水田を調査した。これらも現在のものと考えられるが、2層下面において土師器片が出土している。第Ⅲトレンチでは畦・水路・農道・水田を調査した。古い造構は認められず、遺物も出土しなかった。第Ⅳトレンチでは農道・水路・畦・水田を調査した。西側水田の耕作土下において、幅90cm、深さ50cmほどの溝を発見したが、遺物の出土は認められなかった(79-I~IV)。

第四次調査

工場団地造成に伴う発掘調査である。現水路及び道路を対象に4×12mのトレンチを7カ所入れた(80-T1~7)。

第1トレンチでは、第6層が溝跡の埋土である。幅1.1m、深さ0.15mである。第2層は旧農道の土である。

第2トレンチでは、南北方向で幅0.25~0.35m、深さ0.25mの溝1条、近世陶磁器片と奈良三彩陶枕片が同一層面で出土している。なお、遺物の取り上げ層位とセクション図層位が一致しないようである。第7トレンチも同様。

第3トレンチでは溝跡1条が発見されている。

第4トレンチでは、特に造構は確認されなかった。土師器1点が出土している。

第5トレンチでは溝跡2条が発見された。北側の溝跡は断面が方形を呈し、杭1本を伴う。幅は0.3~0.4m、深さ0.2mであった。南側の溝跡は断面U字形で幅1.4m、深さ0.3mを測る。須恵器の口縁部及び底部片、時期が明確でないが、打ち込まれて列状に並ぶ木杭8本、多量の木片、若干の石が発見された。

第6トレンチでは溝3条が確認された。溝1は幅0.6~0.8m、深さ0.2m、溝2は幅0.4~0.7m、深さ0.2m、溝3は幅0.4~0.65m、深さ0.25mであった。溝2は溝3に切られている。

第7トレンチでは造構は確認されなかった。土師器6点と細片が出土している。

その後の調査

白石条里制跡推定地は新幹線駅前ということもあり、市街化が進行した。区画整理事業以前の図面

と現況を対比し、切り土された範囲は第2図に示した。また関連する発掘調査区、谷津川遺跡、江ノ下遺跡の確認調査範囲、梅田遺跡の確認調査範囲及び事前調査範囲を示した。なお平成10年度頃の奈川堤防改修に伴う発掘調査範囲は資料整理が完了していないので図示できなかった。

区画整理事業完了以降の確認調査のうち、平成10年度以降の確認調査の成果をまとめた（第2表）。

その結果、区画整理後は、表層の遺構が削平されたことによって、遺構、遺物が確認された箇所は非常に少ない。明確な遺構が確認されたのは1カ所のみである（第2図5）。この時、発見されたのは溝1条で、幅が2.4m～2.8mであった。北西から南東方向のもので、約4m分が確認され、堆積土は黒褐色粘土で、検出面は灰褐色粘土であった。

この他、宮城県土地開発公社からの依頼の工業用地拡張工事にともなう確認調査成果も掲載した（第2図）。公社理事長あて調査回答文書では遺構、遺物とも発見されていないと記しているが、実際は南小泉式の土師器が出上していた。これらは再堆積した層から出土したとされる。

第5章 考察

1 水田遺構について

調査の結果、明確な水田遺構は確認されなかった。その理由として、水田遺構発掘調査技術が確立していなかったことがあげられる。当時はまだ、仙台市宮沢遺跡に多く見られる擬似畦畔という遺構の認識もなく、火山灰もしくは砂層が遺構を被う、あるいは、畦畔に沿う木杭列があるなどという条件が無ければ、遺構確認は難しかったと思われる。

また、水田遺構が確認されないケースとして、耕作方法、周期とも関連するが、水田が長期間の断然を挟むことなく、継続して営まれた場合、水田遺構は地下に残らない可能性がある。

近隣における条里遺構は福島県塙日条里条里遺構跡、山崎条里遺構がある。また、条里遺構の存在が指摘されるのは丸森町の西新田条里遺構（志間、引地ほか1985）があったが、昭和41年の圃場整備により姿を消している。

2 奈良三彩について

長さ2.6cm、幅2.8cm、厚さ0.5cmの小破片である。胎土は明るい灰白色で、柔らかい印象を受けるものである。釉は2面にかけられ、横から見ると直角をなして接している。片面は僅かに残存しているだけである。緑と茶褐色を基調とする配色になっており、茶褐色部分が弧状を呈している。緑色はあまり鮮やかな色調ではない。

これまで、宮城県内では奈良三彩に関連するものとして（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター2002）、多賀城市市川橋遺跡（高倉ほか1982）で二彩瓶、仙台市太白区郡山遺跡の郡山廃寺（長島2005）で三彩小壺蓋が確認されている。多賀城市市川橋遺跡1996年調査（佐久間、古川2000）のSB5152では、柱穴掘り方埋土から奈良三彩小壺蓋が発見されている。

奈良三彩は8世紀に入ってから国内で生産されるが、9世紀初頭には二彩も含め、多彩釉陶器の生産は行われなくなることから（植崎1998）、陶枕の時期については8世紀代と推定される。奈良三彩

陶枕の出土例は宮城県はもとより東北地方で初の出土例と考えられる。

近世陶磁器と同一面からの出土であることから、本来、墳墓等に供献された奈良三彩陶枕が江戸後期以降の水田開発によって、墳墓等が破壊され、水田耕作土に混入した可能性が指摘できる。

第6章　まとめ

- 1 白石条里制跡推定地は白石市街地の東南の沖積地に位置する。
- 2 発掘調査の結果、明確な水田遺構は確認できなかった。古墳時代中期の南小泉式の土師器、古代の土師器、須恵器、奈良三彩、近世磁器が出土した。
- 3 奈良三彩陶枕は古代陸奥国（範囲）において初の出土例と考えられる。

引用参考文献

- 阿子島香 1971 「白石盆地の開発と条里制」『白石郷土研究会報』第7・8合併号
- 阿子島香 1971 「白石盆地遺跡分布調査報告」『白石郷土研究会報』第9・10合併号
- 遠藤智、清野俊太朗 1984 梅田遺跡調査報告書 白石市文化財調査報告書第22集
- 斎藤良治 1975 車丁古墳調査報告書 白石市文化財調査報告書第10集
- 佐久間光平、古川一明ほか 2000 市川橋遺跡の調査 県道「泉-塩釜線」関連発掘調査報告書Ⅲ 宮城県文化財調査報告書第184集
- 志間泰治、引地昭夫ほか 1985 「金山の歴史散歩」
- 長島栄一 2005 郡山遺跡 総括編（1） 仙台市文化財調査報告書第283集
- 中嶋彰吾、清野俊太朗 1978 観音崎遺跡調査報告書 白石市文化財調査報告書第18集
- 清野俊太朗、遠藤智 1981 谷津川・江ノ下遺跡調査報告書 白石市文化財調査報告書第23集
- 高倉敏明、滝口卓、石本敬 1982 高崎・市川橋遺跡調査報告書 多賀城市文化財調査報告書第3集
- 柄崎彰一 1998 「日本における施釉陶器の成立と展開」「日本の三彩と緑釉」五島美術館
- 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2002 「奈良三彩関係文献目録」「埋蔵文化財ニュース」106
- 森貴喜 1980 谷津川遺跡 東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ 宮城県文化財調査報告書第62集
- 宮城県 1970 「宮城県各村字調書」「宮城県史」32史料篇9 史料集Ⅲ風土記補遺
- 亘理悟郎 1949 「刈田郡南部の開拓に関する二、三の考察」『白高郷土研究』第2号

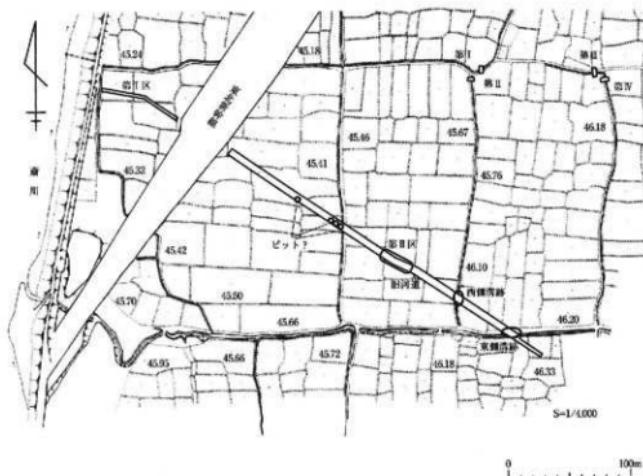


別 遺跡名	種 別	時 代	別 遺跡名	種 別	時 代
1 上高野遺跡	散布地、製鉄遺跡	縄文早~中、奈良、平安	13 中宿遺跡	陣屋	近世
2 芬井遺跡	散布地、製鉄遺跡	縄文早~晚、弥生、古代	14 月心院遺跡	散布地、寺苑	古代、近世
3 一本木南遺跡	散布地	縄文前、幾、幾、古代、中世	15 鳴蛇内遺跡	散布地	弥生~平安
4 勝所内遺跡	堀落	縄文早、中、後、平安	16 梅宮内遺跡	散布地	奈良、平安
5 青木遺跡	堀落	縄文早、中、幾、弥生、平安	17 櫻音崎遺跡	集落	古墳後~平安
6 下船遺跡	散布地、城郭、製鉄遺跡	縄文後、平安、中世	18 大深遺跡	散布地、官衛	弥生~中世
7 道内原遺跡	散布地、製鉄遺跡	奈良、平安	19 本郷遺跡	散布地	古代
8 爰田南寺跡	寺院	平安	20 海山遺跡	集落	弥生、古墳
9 下ノ神町遺跡	散布地	縄文中、平安	21 鹿渠古墳群	前方後円墳、円墳	古墳、古代
10 四上遺跡	散布地	縄文前、中	22 登津川遺跡	散布地	縄文~古代
11 勝生山遺跡	堀落	縄文前一後、弥生	23 白石多里削跡指定地	水田跡	古代、中世
12 鮎吉原遺跡	散布地	古墳時代	24 和堂遺跡	散布地	古墳後、古代

第1図 白石市内遺跡地図



第2図 白石余田製造拠点地圖(辺堀地区調査区)



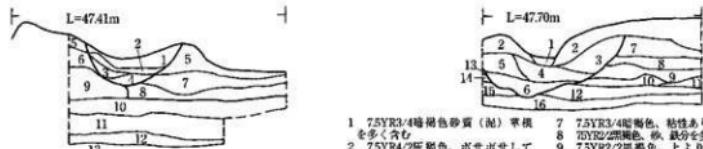
第3図 区画整理以前の地形図と発掘調査区

第1表 市内条里関係地名表

番号	地区名(旧村名)	地名(旧字名)	備考
1	施河(五賀)	八反田	
2	施河(平賀)	一五ノ目	
3	森川(上森川)	下四反田	
4	*	五反田	
5	森川(森ノ子)	三五田	
6	*	四反田	
7	*	市ノ坪	一ノ坪?
8	*	五反田南	
9	森合	五反田	
10	中日	一丁田	
11	*	北六反田	
12	*	三反田	
13	*	西反田	
14	*	五反田	
15	*	十枚田	
16	*	六反田	
17	白石郷	金坪	
18	*	六反田	
19	森木	二反田	
20	郡山	江坪	
21	*	五反田	
22	小下倉	八反田	
23	三沢	八反田	
24	*	五丁目	五条目?
25	御谷	八反田	
26	*	御丁目	五条目?
27	小原	金坪	

第2表 平成10年度以降、白石条里制跡推定地における確認調査

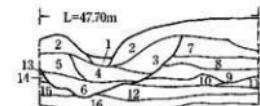
番号	確認調査実施年月日	掘削面積(m ²)
1	平成11年4月15日	20
2	平成11年8月29日	59
3	平成11年8月25日	24
4	平成11年12月9日	19
5	平成12年2月15日	120
6	平成12年3月12日	25
7	平成12年7月3日～4日	417
8	平成12年7月29日	33
9	平成12年8月8日	55
10	平成13年8月24日	53
11	平成13年10月23日	38
12	平成13年9月19日	44
13	平成14年4月23日	28
14	平成14年4月23日	29
15	平成15年2月13日	126
16	平成15年3月18日	15
17	平成15年5月23日	40
18	平成15年12月15日	20
19	平成16年12月6日	27
20	平成17年10月11日	38
21	平成17年10月17日～18日	76
22	平成17年11月21日	14
23	平成12年2月22日～3月2日	2,350
	合計	3,670



1. 混(英土)
2. 砂
3. 泥土を含む砂
4. 砂
5. 砂土、桂野、斑状に酸化鉄を含む
6. 砂土、砂粘土
7. 砂、酸化鉄を含む
8. 砂、ねずみ色
9. 灰色粘土、黒色ぎみ、草根を含む
10. 黑灰粘土、粘性あり、砂粉を多く含む
11. 砂粉、灰色
12. シルト質、青灰色
13. 粘土

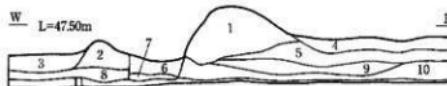
第I トレンチ西側ベルト

第一次調査断面図



1. 7.5YR3/4暗褐色砂質(潤) 粘根を多く含む
2. 7.5YR4/2暗褐色、ボヤボヤしてしまった土
3. 7.5YK3/3褐色、粘性あり、酸化鉄を含む
4. 7.5YR4/1開灰色砂を多く含む、草根を含む
5. 7.5YR4/1暗灰色、根を含む、粘性あり、酸化鉄を含む
6. 7.5YR3/1暗褐色砂を含む(多)
7. 7.5YR3/4暗褐色、粘性あり
8. 20YR2/2褐色、砂、粘分を多く含む
9. 7.5YR2/2暗褐色、上より多く含む
10. 10Y4/1灰土
11. 10Y4/4灰土、原竹根含む、粘性あり
12. 10YR4/1褐色、根を含む
13. 7.5YR4/2褐色、粘性あり
14. 7.5YR3/1暗褐色、粘性あり
15. 7.5GVR1/1暗褐色砂質
16. 7.5YR1/1褐色砂質、粘性あり、遺物(土器碎片出土)

第II トレンチ南壁



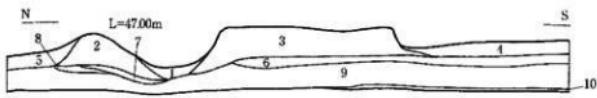
第I トレンチ断面図

1. 7.5YR4/1褐色砂質上
2. 10YR5/1褐色粘土
3. 10YR4/2暗褐色粘土
4. 10YR4/2褐色粘土
5. 10YR4/4に褐色砂
6. 5 YR6/1灰土
7. 7.5YR2/8黄褐色細砂
8. 10YR5/1褐色細砂
9. 10YR6/3にいわゆる黄褐色細砂
10. 7.5YR7/8黄褐色細砂
11. 8 Y4/1灰色粘土



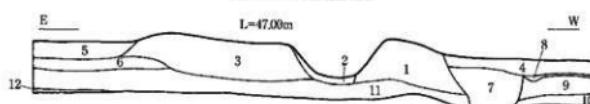
第II トレンチ断面図

1. 10YR6/1褐色砂
2. 10YR4/25黄褐色粘土
3. 10YR4/25黄褐色粘土
4. 10YR4/25黄褐色粘土
5. 10YR5/1灰土
6. 7.5YR5/2暗褐色細砂
7. 7.5YR7/8黄褐色細砂へ中砂
8. 5 Y4/1灰色粘土



1. 10YR6/2灰青褐色粘土
2. 10YR4/2系色粘土
3. 10YR4/2灰青褐色粘土
4. 10YR4/2灰青褐色粘土
5. 10YR4/25黄褐色粘土
6. 10YR7/21にいわゆる黄褐色細砂
7. 10YR7/31にいわゆる黄褐色細砂
8. 10YR4/25黄褐色シルト
9. 25YR4/1灰灰粘土
10. 10YR5/25褐色細砂

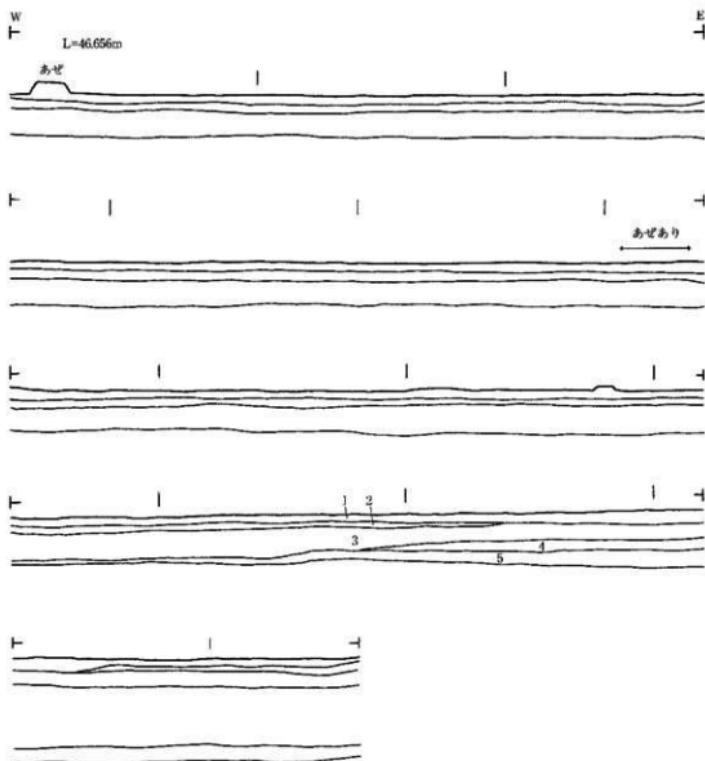
第III トレンチ断面図



1. 10YR5/1褐色粘土
2. 10YR6/2灰青褐色粘土
3. 10YR5/1褐色粘土
4. 10YR4/25黄褐色粘土
5. 10YR4/25黄褐色粘土
6. 10YR7/3にいわゆる黄褐色細砂
7. 10YR3/1褐色粘土
8. 25YR6/1褐色細砂
9. 25YR5/1褐色粘土
10. 25YR5/1灰灰粘土
11. 25YR4/1灰灰粘土
12. 10YR5/25褐色細砂

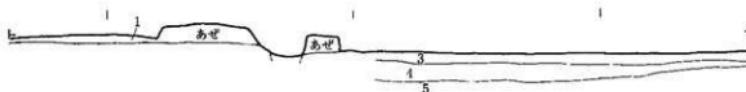
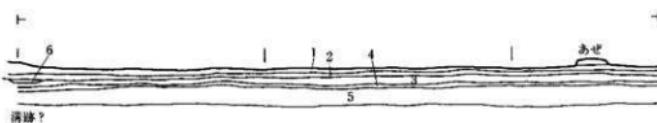
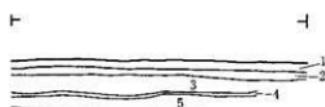
第IV トレンチ断面図

第三次調査断面図
第4図 第一次、三次調査断面図 (S=1/60)



- 1 10YR5/2灰黄褐色シルト、部分的に還元を受け赤みがかったりしている。水田耕土
- 2 10YR4/2灰黄褐色シルト、1層よりもより強いて、水面耕土
- 3 10YR4/1褐色褐色粘土質シルト、粘性強い。
- 4 10YR4/2灰黄褐色シルト、砂を含む。粘性あり、高師小層入る
- 5 10YR3/1黒褐色粘土質シルト、粘性強い、高師小層入る

第5図 第二次調査 第I区断面図（新幹線西側）(S=1/100)

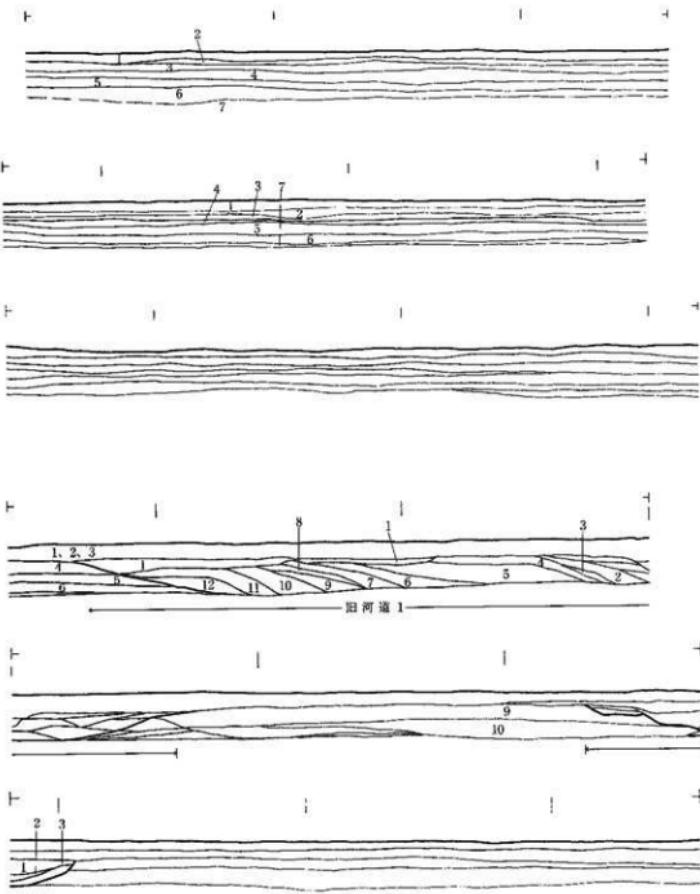


第二次Ⅱ区新幹線東側
 1 水田耕作土、西側1層と同じ
 2 水田耕作土、西側2層と同じ
 3 10YR3/1墨褐色粘土質シルト、粘性強い
 4 10YR4/2灰褐色シルト、砂の量は地点によって相違あり、東端ほど少なく、西に向かうほど多くなる傾向があり、砂層と変わりなくなる
 5 10YR3/1墨褐色粘土質シルト、粘性強い

3段目漂跡?
 6 25Y5/1黄灰色、砂

4段目漂跡
 7 10YR4/1墨褐色シルト、砂、粘性あり
 8 25Y4/1黄灰、砂
 9 25Y5/1黄灰、砂

第6図 第二次調査 第Ⅱ区断面図（新幹線東側）1 (S=1/100)



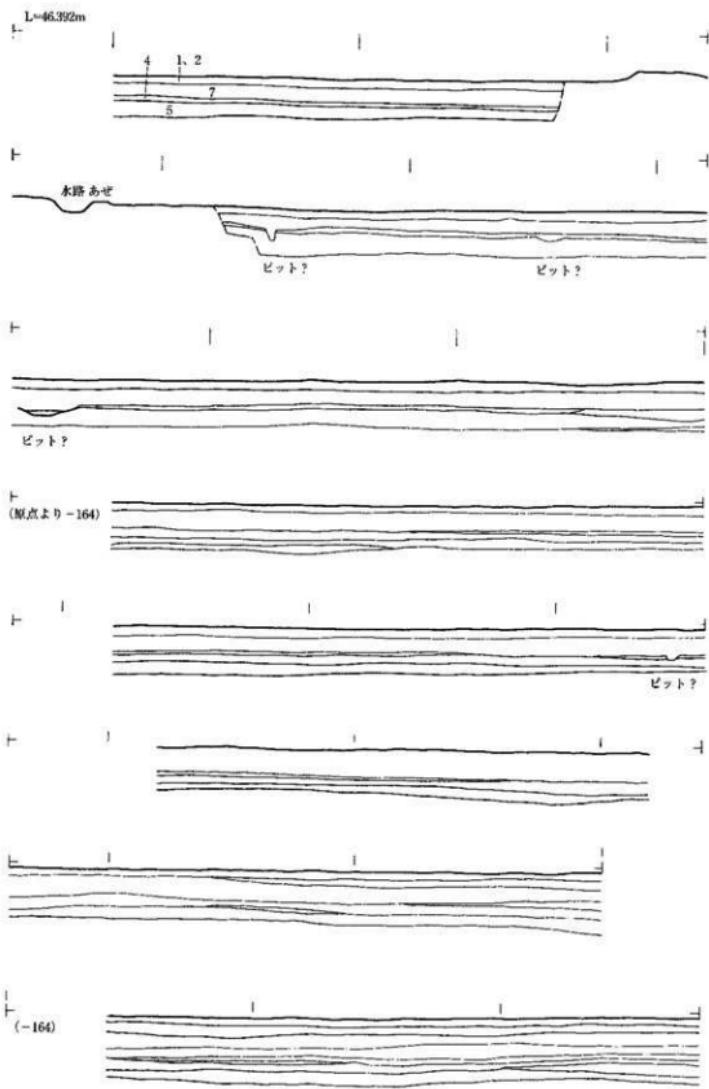
第二区Ⅱ区新幹線東側 2

- 1 空土
- 2 5Y3/6灰オーリーブ色、酸化上・カーゴンを多く含む、非常に粘性が強い
- 3 5Y4/5オリーブ色、1層よりもブロック状の酸化鉄を含み、粘性は弱い
- 4 5Y1/5灰色、無機粒子を若干含む、砂質性の土
- 5 25YL/3黒褐色、非常に粘性が強い、9mm程度の暗褐色ブロックを多く含む
- 6 25YL/3黒褐色、非常に粘性が強い、暗褐色ブロックを若干含む
- 7 10Y1/5灰色
- 8 25YL/4費灰(3mm大砂利)、黄褐色ブロックを含む
- 9、10 10YR5/2灰黄色粗砂、部分的にラミナの砂を含む

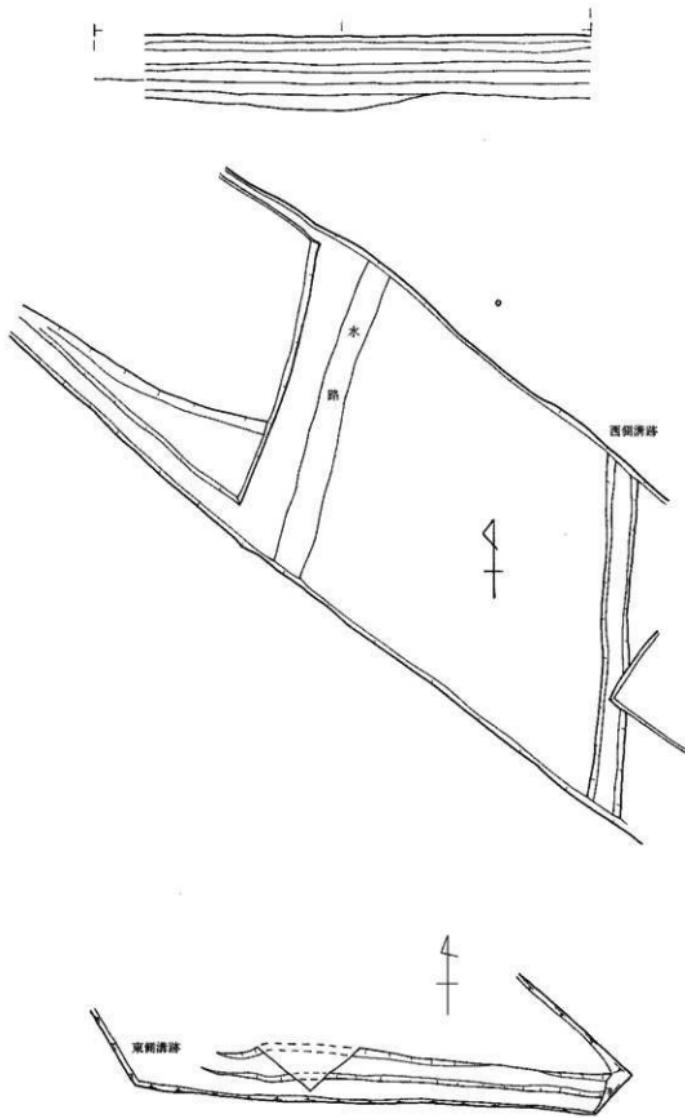
旧河道 2

- 1 25Y4/1黄褐色移質シルト、粘性あり
- 2 25Y4/1灰灰色砂
- 3 25Y4/1黄灰色砂
- 4 灰黃褐色粗砂
- 5 10YR5/2灰黃褐色粗砂
- 6~10 5Y5/7灰色砂
- 11 25Y3/1黒褐色シルト
- 12 25Y4/1黄灰色砂

第7図 第二次調査 第Ⅱ区断面図(新幹線東側) 2 (S=1/100)



第8図 第二次調査 第II区断面図（新幹線東側）3 (S=1/100)



第9図 第二次調査 第II区断面図4 溝跡 ($S=1/100$)

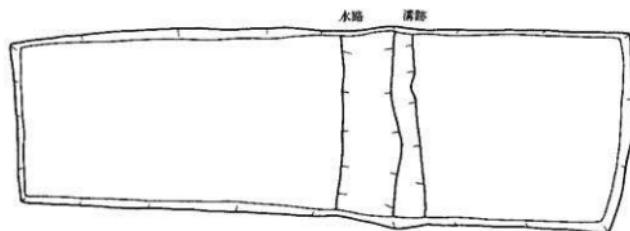


- 1 7SYR3/3暗褐色シルト、山砂を多量に含む
2 7SYR3/3暗褐色シルト、山砂を多量に含む
3 7SYR2/2暗褐色シルト、酸化鉄を若干下に含む、畑の耕作土
4 7SYR2/3褐色細砂シルト、小石砂を多量に含む
5 7SYR4/6褐色細砂、水性堆積でグライ化（旧転路）、小砂を含む
6 7SYR2/3褐色細砂シルト、水性堆積でグライ化（旧転路）、小砂を含む
7 10YR4/1灰色中砂

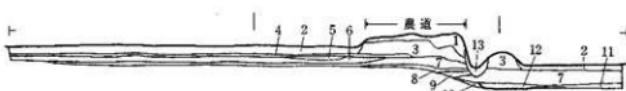
第1 レンチ北壁断面図



- 1 7SYR4/6褐色シルト、粗粒混入
2 7SYR3/4褐色細砂シルト、粘性あり、塊状
3 7SYR3/3暗褐色シルト、粗粒上
4 7SYR2/1黒褐色シルト、酸化鉄、細砂を含む
5 7SYR3/1褐色細砂シルト、中砂を多量に含む、水性堆積層
6 7SYR3/8褐色シルト
7 7SYR4/1褐色灰砂（流水路）、酸化鉄を含む
8 10YR4/1灰色シルト（流水路）、粗砂を含む



第2 レンチ平面図、北壁断面図



- 1 7SYR2/3暗褐色シルト、山砂を多量に含む（現道路）
2 7SYR3/4褐色細砂シルト、耕作土
3 7SYR3/3暗褐色シルト、若T、玉砂を含む
4 7SYR3/6褐色砂質シルト、酸化鉄を含む
5 7SYR3/2褐色砂質シルト
6 7SYR3/3褐色砂質シルト
7 7SYR2/1褐色シルト
8 7SYR2/2黒褐色シルト、粘性あり
9 7SYR3/1黒褐色シルト、酸化鉄分を多く含む
10 7SYR3/6褐色砂質シルト
11 7SYR4/1褐色砂質シルト、酸化鉄分を多量に含む
12 10YR4/1褐色シルト、水性堆積
13 新地
14 10YR4/1褐色シルト、中砂を含む、サザナリ

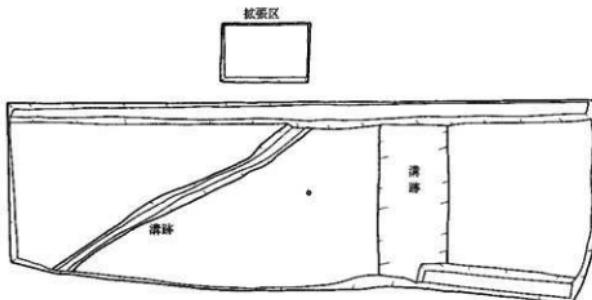
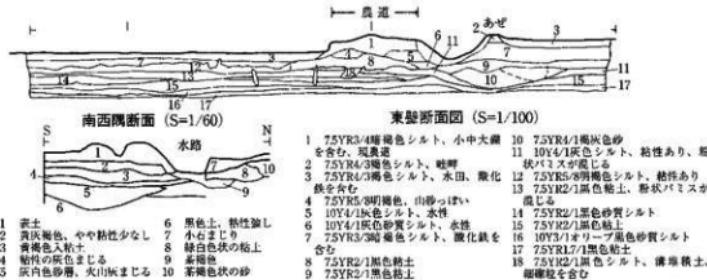
第3 レンチ西壁断面図



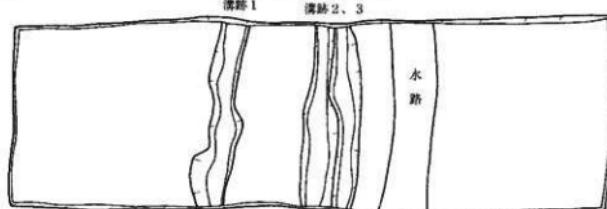
- 1 7SYR3/1黒褐色シルト、耕作土
2 7SYR3/2暗褐色シルト、酸化鉄を多量に含む
3 7SYR3/4褐色細砂シルト、若干灰化物を含む
4 7SYR2/1褐色シルト、粘性あり、酸化鉄、灰化物を若干含む

第4 レンチ北壁断面図

第10図 第四次調査の平面図、断面図1 (S=1/100)



第5 レンチ平面図 (S=1/100)、断面図



第6 レンチ平面図、断面図 (S=1/100)

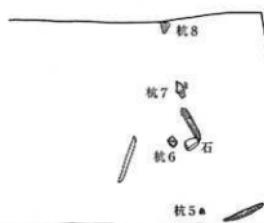
第11図 第四次調査の平面図、断面図2



- 1 7SYR3/4暗褐色シルト、しまりなし、現在の吐
2 7SYR3/3暗褐色シルト、しまりなし、酸化鉄を若干含む、耕作土
3 7SYR3/2暗褐色シルト、酸化鉄を若干含む
4 7SYR3/1黒褐色シルト、しまりなし、酸化鉄を若干含む、7SYR2/2黒褐色シルトを窪立状に含む
5 7SYR2/2黒褐色シルト、粘性あり、酸化鉄を若干含む
6 7SYR3/1黒褐色シルト、酸化鉄を若干含み、半硬を多量に含む、しまりなし
7 7SYR3/1黒褐色シルト、酸化鉄を若干含む、粘性あり
8 7SYR4/1闊灰色砂層（ジャリジャリする）、この層上面より遺物出土

S=1/100

第7トレンチ西壁断面図



第5トレンチ
本片、土器の出土状況

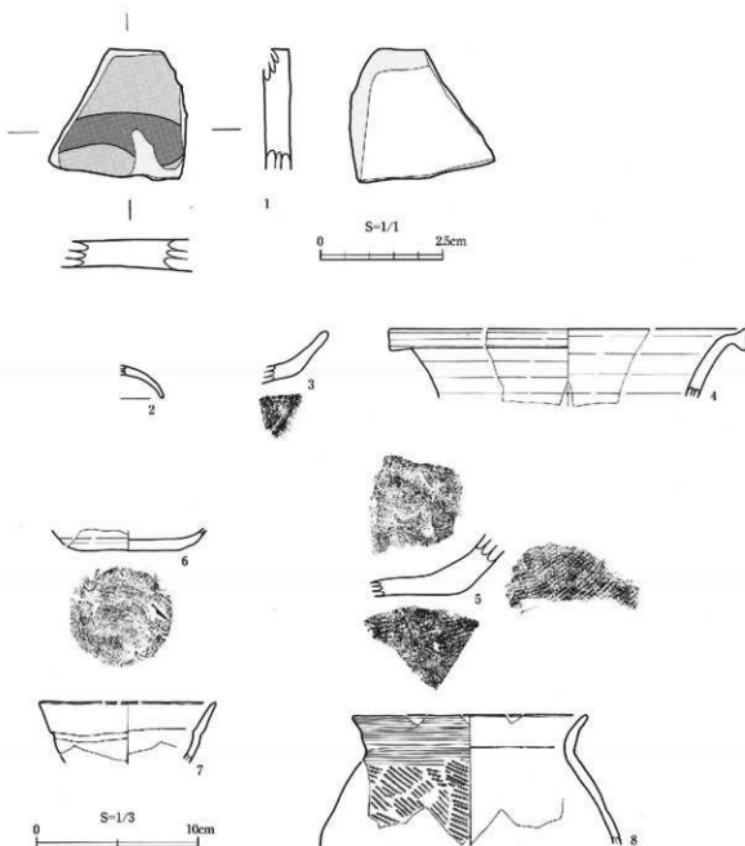


第4トレンチ



S=1/30

第12図 第四次調査の平面図・断面図3



出土遺物観察表

団版番号	出土位置	種別	外観の特徴	内面の特徴	備考
第1388 1、 カラー写真1～3	第四次調査、第2トレング チ、3層確認面	奈良三彩陶枕	三彩	ナデ	
第1388 2、 写真図版20、21	第四次調査、第2トレング チ、3層確認面	蓋付茶碗の蓋	肥前乗付、矢羽根文様、 18世紀末～19世紀初め	四方たすき	推定口径7.6cm
第1388 3	第四次調査、第4トレング チ、掲げ土	土師器坏	ロクロナデ、回転系切、 8世紀後半～9世紀初め	マメフ	
第1388 4、 写真23の2	第四次調査、第5トレング チ、4肩	須恵器壺	ロクロナデ、8世紀前半？	ロクロナデ	推定口径22cm
第1388 5、 写真図版23の1	第四次調査、第5トレング チ、掲げ土	須恵器底部	平行叩目、8世紀後半以降	カキメ	
第1388 6、 写真図版22	第四次調査、第7トレング チ、2層上面	須恵器底部	ロクロナデ、火ダメキ痕 あり、8世紀後半～9世紀中頃	マメフ、底面は回転系切	底径6cm
第1388 7、 写真図版24の2	平成12年確認調査、2000 年2月29日	土師器碗	ミガキ、器内丸み、南小泉式	黒色物質付着	推定口径11cm、 残存高3.7cm
第1388 8、 写真図版24の1	平成12年確認調査、2000 年2月29日	土師器壺	ココナデ、やや彫頬な胡毛目、黒色物質付着、南小泉式	マメフ	推定口径14.4cm、 残存高8.1cm

第13図 出土遺物

田上遺跡調査概要

遺跡名：田上遺跡

(宮城県遺跡地名表登載番号02043)

所在地：白石市福岡長袋字田上

調査対象面積：225m²

発掘面積：12.96m²

調査月日：昭和61年3月5日、7日

調査担当：白石市教育委員会

調査指導：白石市文化財保護委員長 中橋彰吾

白石市文化財保護委員 高橋辰男

1. 経過

東北電力株式会社宮城支店取締役支店長深井保夫から昭和61年1月29日付官支立用発第598号で白石鉄塔立替工事に伴う遺跡発掘届の提出があった。

これにより協議したところ鉄塔を支持する脚部は土圧によって強度を維持させる工法で設計しているとのことであり、掘削部だけを部分掘削するので掘り過ぎ等はない。掘り過ぎは強度の上で低下するとのことであり、このことから調査は脚底部の面積に限った。

2. 立地と環境

田上遺跡は、白石市福岡長袋字田上にあり、東北本線白石駅の北北西、南部山に繋がる丘陵地にある。本遺跡は石器片を多数表面採取される遺跡として、よく知られていた。以前に繊維土器が採取されており、このことから縄文前期から後期の遺跡とされていたが、これまで発掘調査されたことはなかった。

本遺跡の周辺には、長坂前遺跡、小森遺跡、入屋敷前遺跡、三部山遺跡などがあり、田上遺跡のある丘陵と南側の丘陵との間を天津沢川が流れている。

周辺の遺跡には、田上遺跡も含めて縄文の遺跡が多く、又白石における縄文遺跡も周辺の丘陵上に点在している。

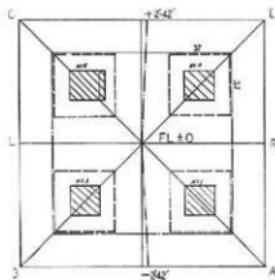
3. 年代と考察

田上遺跡は縄文時代前期から中期にかけての遺跡であろうと推定されてきたが、今回の調査によりさらに明確となった。

今回の調査によって発見された遺構はなかったが石器片や土器片数点が出上した。石器片は全て石器を整形する際の破片であった。土器片は4号トレンチの不整形円状のピット状落ちこみの中から出土したものが大部分を占めている。この落ちこみは、壁面や底部に人工的整形の痕跡が全く認められ



NO 38.



第2図 昭和61年発掘区 (S=1/300)

ず、何らかの原因によって自然に形成されたものと推定する。

出土した土器片は口縁部1点、体部6点がありこれらの土器片から舟入島下層式と比定され、このことから田上遺跡は、縄文早期末の遺跡であることが明確となった。

しかし今回の調査面積は極く狭いものであったため遺構の発見もなく、遺物の出土量も少なかったので、今後の本格的発掘調査に期待するところである。

4. 平成21年度の確認調査結果

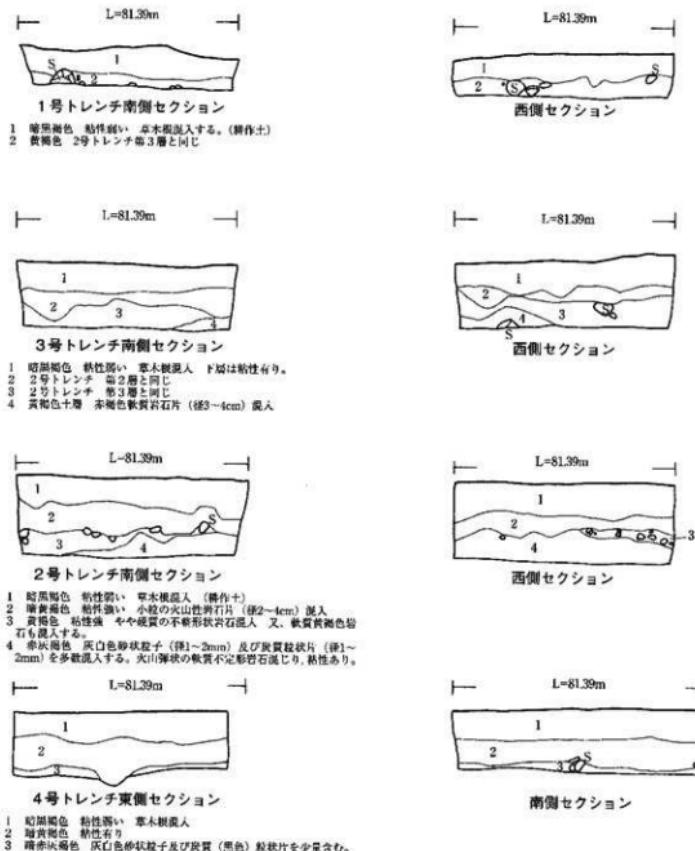
所在地：白石市福岡長袋字田上20-1の一部

調査要因：個人住宅建設

調査期日：平成21年2月13日

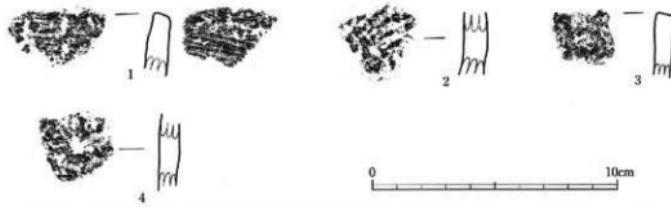
調査面積：459.17m² (掘削面積22.75m²)

確認調査トレンチは住宅建築予定箇所を避け3箇所設定した。その結果、T 3では次の土層が確認された。第



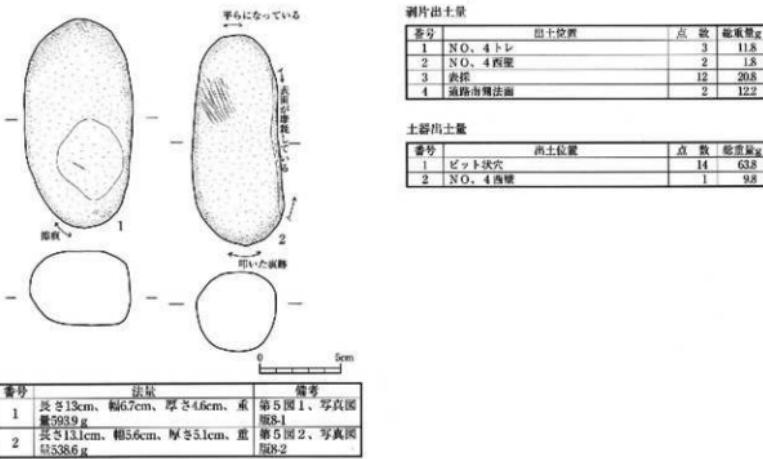
第3図 土層断面図 (S=1/40)

1層、表土、10YR5/3にぶい黄褐色シルト、30cm、第2層、10YR5/8黄褐色粘土、18cm、第3層、7.5YRにぶい赤褐色粘土、直径3~6cmの紫色礫を多く含む。T 2の第1~2層で剥片1点、T 1付近の表土から肥前近代磁器1点が発見された。



番号	出土位置	外面の特徴	内面の特徴	鉢寸	備考
1	NO. 4 西壁	原住陶器	条板文	縹毛土器	第4図1、写真図版7-1
2	ビット状穴	縹文又L	ナデ	縹毛土器	第4図2、写真図版7-2
3	ビット状穴	ナデ	ナデ	縹毛土器	第4図3、写真図版7-3
4	ビット状穴	剥落	ナデ	縹毛土器	第4図4、写真図版7-4

第4図 出土土器



第5図 出土石器

鷹巣古墳群25号墳範囲確認調査

県遺跡番号：02005（宮城県指定史跡）

所 在 地：白石市鷹巣字堂の入山3の1

調査要因：住宅地造成計画による現状変更

調査期日：昭和57年11月9日～13日 調査面積：63m²

調査員：中橋彰吾、高橋辰男、遠藤智

鷹巣古墳群は戦前の片倉信光による調査報告によって、詳細が明らかにされ、学術的な位置づけがなされていた。

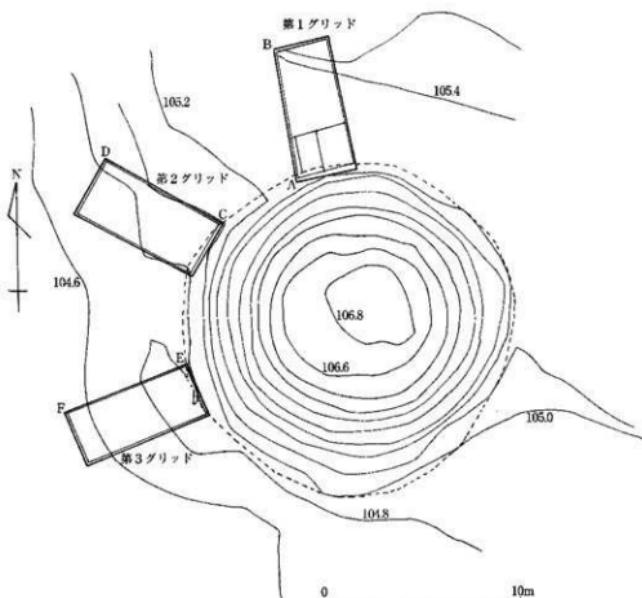
戦後、住宅団地造成によって数次の発掘調査が実施された後、古墳が破壊されてきた。現在する古墳は少なくなっている。今回の古墳は鷹巣古墳群の中でも東側に位置し、標高の高い場所にある。

昭和47年に鷹巣古墳群の一部が宮城県指定史跡となり、昭和50年代になると、白石市教育委員会による史跡のまづくり事業によって、古墳公園が順次整備された。

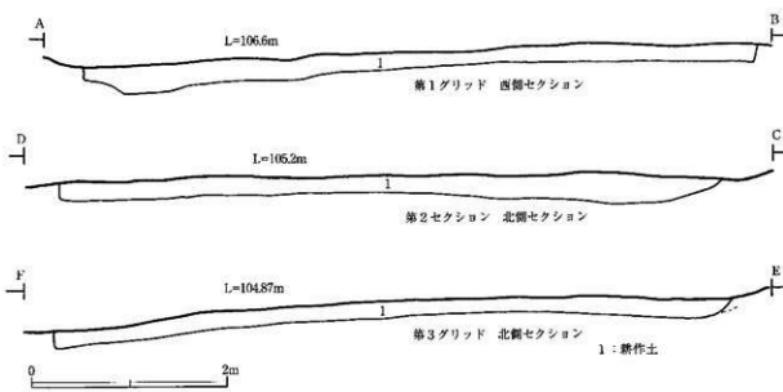
そうした中、周辺は次第に宅地化が進み、25号墳の西に隣接する箇所において、住宅地造成計画が持ち上がり、現状変更の協議がなされた。当教育委員会では、県文化財保護課に指示を仰ぎ、古墳の範囲及び周溝の有無を確認した後、現状変更の判断をすることとなった。

調査は牧草地となっている古墳に3カ所のトレンチを設定する形で行われた。約7m×3m規模のトレンチにおいては周溝は確認されなかった。いずれも表土を取り除くと地山が現れた。第1トレンチでは、落ち込み状のものが確認され、一部で掘り下げを行っている。併せて墳丘の測量も行った。1/100の地形図と1/20の断面図を作成している。調査結果を受け、宅地造成計画の現状変更は許可となった。

墳頂では106.8mで、墳丘の立ち上がりの標高は105m付近である。ほぼ円形で直径は17m、墳丘の高さは約1.75mと考えられる。等高線はほぼ円形を呈し、乱れている箇所は少なく、盗掘等は受けていないと考えられる。古墳が立地している斜面は北側が高く、南側へ傾斜している地形である。



第1図 トレンチ配置図



第2図 セクション図

報告書抄録

ふりがな	しろいしじょうりせいあとすいていちほかはくつちょうさほうこくしょ							
書名	白石条里制跡推定地ほか発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	白石市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第35集							
編著者名	日下和寿、千葉典男、清野俊太朗							
編集機関	白石市教育委員会							
所在地	〒989-0206 宮城県白石市字寺屋敷前25番地6 TEL: 0224(22)1343							
発行年月日	西暦2009年8月24日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	発掘面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しろいしじょうり 白石条里 制跡推定地	白石市大鷹沢三沢、 旭町	04206	02400	37° 59' 29"	140° 38' 4°	19781004~ 19781005. 19781117~ 19781129. 19790309~ 19790311. 19801211~ 19810210	2994.50	新幹線駅前 土地区画整 理事業等
出土遺跡	白石市福岡長袋字 田上	04206	02043	38° 1' 7"	140° 36' 47"	19860305~ 19860307	12.96	電力鉄塔建 設
たかのすにじゅうご 鷹巣25号 墳	白石市鷹巣字堂の 入山3の1	04206	02005	38° 00' 3"	140° 38' 43"	19821109~ 19821113	63.00	範囲確認調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
白石条里制 跡推定地	水田跡	古墳時代 代、古代	溝跡12、旧河道2、 ピット4、木枕列1	奈良三彩陶枕、須恵器、 土師器、近世磁器(肥前)		奈良三彩陶枕が出 土した。		
出土遺跡	散布地	縄文時代	風倒木? 1基	縄文土器(早期)、石器、 近世陶器		縄文時代早期の遺 物が確認された。		
鷹巣25号墳	古墳	古墳時代	なし	なし		周溝は確認され なかつた。		
要約	白石条里制跡推定地では日本列島北限となる奈良三彩陶枕が出土した。明確な水田遺構は確認されなかつた。 田上遺跡は、これまで詳細な年代が不明であったが、早期まで遡ることが判明した。 鷹巣25号墳は周溝がないことが確認された。							



写真1 奈良三彩表面



写真2 奈良三彩内面



写真3 奈良三彩側面



写真4 奈良三彩出土状況
(第四次調査、第2トレンチ、3層確認面)



写真5 肥前染付蓋出土状況
(第四次調査、第2トレンチ、3層確認面)



写真6 第四次調査第5トレンチの断面と木杭の状況

写真図版 白石条里制路推定地（1）



写真図版1 調査前の状況（南から）



写真図版2 第二次調査の航空写真（南から）

写真図版 白石条里制跡推定地（2）



写真図版3 第二次調査（西から）



写真図版4 第二次調査第Ⅰ区（東から）



写真図版5 第二次調査第Ⅱ区（西から）

写真図版 白石条里制跡推定地（3）



写真図版6 第三次調査I トレンチ断面



写真図版7 第三次調査II トレンチ断面



写真図版8 第三次調査III トレンチ断面



写真図版9 第三次調査IV トレンチ断面



写真図版10 第四次調査第1 トレンチ断面

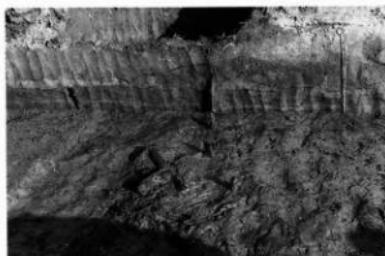


写真図版11 第四次調査第2 トレンチ断面

写真図版 白石条里制跡推定地 (4)



写真図版12 第四次調査第3トレンチ



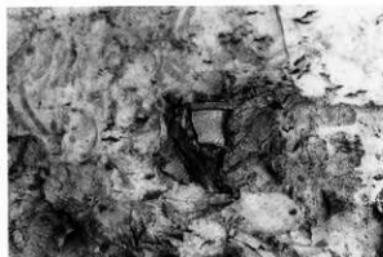
写真図版13 第四次調査第5トレンチ



写真図版14 第四次調査第5トレンチ木杭の状況



写真図版15 第四次調査第5トレンチ溝跡検出状況



写真図版16 第四次調査第5トレンチ須恵器出土状況



写真図版17 第四次調査第6トレンチ断面

写真図版 白石条里制跡推定地（5）



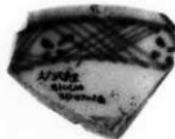
写真図版18 第四次調査第6トレンチ、溝跡2、3



写真図版19 第四次調査第6トレンチ溝跡1



写真図版20 肥前染付外面



写真図版21 肥前染付内面



写真図版22 須恵器底面



写真図版23 須恵器破片

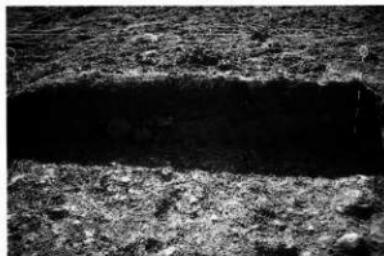


写真図版24 土師器

写真図版 白石条里制跡推定地 (6)



写真図版1 昭和61年発掘調査（西から）



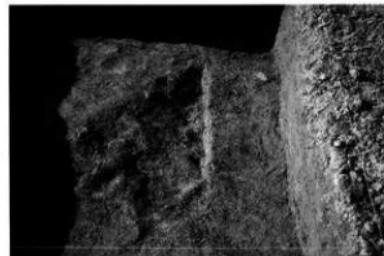
写真図版2 1号トレンチ西側セクション



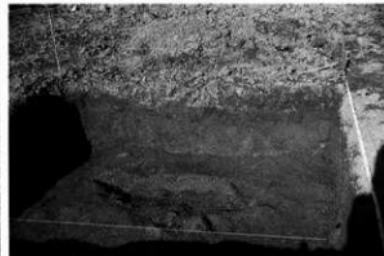
写真図版3 2号トレンチ西側セクション



写真図版4 3号トレンチ西側セクション



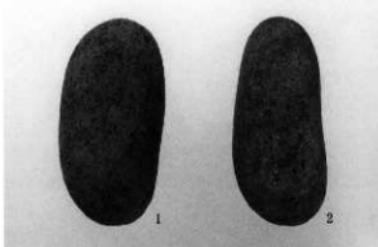
写真図版5 4号トレンチのピット状落ち込み



写真図版6 4号トレンチ東側セクション



写真図版7 出土土器



写真図版8 出土石器

写真図版 田上遺跡



写真図版1 25号墳近景



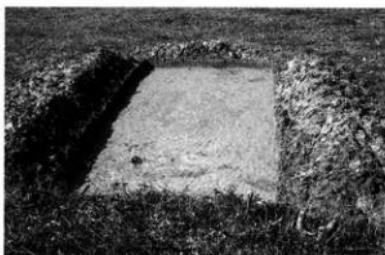
写真図版2 発掘調査風景



写真図版3 第1グリッド全景



写真図版4 第1グリッドセクション



写真図版5 第2グリッド全景



写真図版6 第3グリッド全景

写真図版 鷺巣古墳群25号墳

白石市文化財調査報告書 第35集

白石条里制跡推定地ほか発掘調査報告書

平成21年8月18日印刷

平成21年8月24日発行

編集・発行 白石市教育委員会
〒989-0206 宮城県白石市字寺屋敷前25番地6

電話：0224（22）1343

印 刷 株式会社東北プリント
〒980-0822 仙台市青葉区立町24-24
電話：022（263）1166

